

自然再生センター

飯梨川部会ニュース

2007年10月22日発

連絡先 0854-32-2117

t313@isis.ocn.ne.jp

美見昭光 (みいみ)

いま飯梨川河川敷に 高い関心

「自然再生推進法」の実践

2003年1月に施行された「自然再生推進法」に基づいて、何とか中海を、魚介類や海藻の豊かな湖に再生できないか！との願いを持った人たちが島根大学教授相崎守弘氏の呼びかけで、自然再生を目指すNPO法人船越元熙氏を司会者として会議を開いたのは2005年の春でした。

会議では、とりあえず「米子湾の自
になりました。米子湾は島根・鳥
に、深い浚渫窪地があり水質悪
出発点としたわけです。ここに
研究者、環境に関心を持つ島
O法人のメンバー、環境改善を目
の多様な顔ぶれを見ただけで楽しく



然再生に向けての勉強会」から始めること
取両県の人々を繋ぐ位置にあるととも
化の厳しい所です。これを勉強対象の
参加してきた人たちは、色んな分野の
根・鳥取両県の市民、漁協役員、NP
指す企業家、行政からの個人参加と、そ
なるようなメンバーでした。

2005年4月21日の第1回勉強会には28人が参加、5人のパネラーから「昔の中海」を語って貰いました。第6回の「中海・十神湾の自然を考える」は安来市和鋼会館で行い、地元市民の高い関心を反映して115人の参加でした。色々なテーマで月1回のペースを崩さず、11回の勉強会とまとめて1年が過ぎました。

勉強会のメンバーは、中海の現状について共通の認識を深めることができ、ある程度中海についての共通の科学的知見を持って2006年4月22日の「自然再生センター」の結成を迎えることができました。その後同センターは県を越える活動に備えて国の認可によるNPO法人資格を取得しました。その後同センターは「自然再生技術認定」などの事業とは別に、これから紹介する「協議会」の結成に向けて、多様な主体者を繋ぐ触媒のような、貴重な役割を果たしてきたのでした。

そして「自然再生センター・飯梨川流域部会」としては、これから紹介する「飯梨川赤江河川敷広場」の取り組みや「飯梨川河川敷牧草植生の展望」など実験的な事業から活動をはじめています。

「協議会」結成へ

「自然再生推進法」（以下法と略す）をじっくり読んでみると、法に基づく「自然再生協議会」は「勉強会」のメンバーがつくろうと思えば勝手につくれるというものではありませんでした。法の定めでは、事業

対象地域を管理する者か、又は管理者の委託を受けて事業をする者を「実施者」と名付け、この「実施者」にしか「協議会」を立ち上げることはできません。そして出来上がる「協議会」の構成メンバーは、希望する市民、地権者、研究者、NPO法人、公共団体、企業者、と多様な主体者を網羅していて、且つその人たちが委員となって協議会を構成しなければならず、又事業に関連する行政機関は協議会に入る義務が課せられています。そしてこの協議会は、対象地域の自然再生の全体構想と再生事業計画を審議し採択する権限を付与されています。この一連の法の内容は何を意味するかと言えば、住民がきままに協議会をつくって再生事業を決めることを規制し、同時に行政がきままに再生事業を決めることをも規制し、自然再生については官・民が初めから同じテーブルについて地域社会で合意を形成してすすめて下さいと指示しているのです。これは、いままでの公共事業のトップダウン方式とは全く違うすすめ方です。法は住民と行政が対等に責任を持って事業を決めることを求めています。それを可能にする結節点として、法は「多様な生態系を再生する」ということを目標にかかげ、「科学的知見に基づいて事をすすめる」方法を提起しています。さらに法自身が「自然再生」の科学的な対処のあり方を示しています。具体的には、良質な自然を積極的に維持する「保全」、損なわれた自然を取り戻す「再生」、自然の失われた環境に自然を取り戻す「創出」、と「自然再生」の内容を3つに分け、実施に当たっては、計画→実施→モニタリング→多様な生態系の回復がなければ再計画、というふうに科学的な自然再生の手順を指示しています。しかしこれらの科学的な姿勢を顕在化させ合意形成に向けていくのは簡単なことではありません。勉強会のメンバーは2005年度1年間の勉強会を経て2006年4月22日に「自然再生センター」を発足させ、2006年度には行政の合意を得て「自然再生協議会設立準備会」を立ち上げて、1年かけて行政を含む多様な主体者の勉強会と合議を繰り返し、お互いに科学的知見を深め合い、信頼関係を醸成しながら「中海自然再生協議会」は2007年6月30日に開設されました。この間結成総会に先立って委員を公募し、若干メンバーは増えています。また協議会の規約は、必要な地域部会や課題別部会の設置に道を開いており、これを受けて8月16日には「中海自然再生協議会飯梨川流域部会」が開設されました。

この結成総会では、飲み水の水源としての飯梨川の重要性に鑑み、今後も毎年、島根大学との共催で「飯梨川一斉水質調査」を実施しましょう。来春3月には飯梨川の全流域を対象に自然再生の全体構想を策定しましょうと話し合い、最後に三島 俊夫氏を会長に選出しました。

赤江河川敷でのモデルづくり

飯梨川の下流の中海まで10km余りの河川敷は、50mから100mの中で業平竹やクズ・ヨシ・雑木が密生して人を寄せ付けず、景観も損なわれています。堤防は刈り取って冬野焼きができていれば、春はワラビが採れたり珍しい植物にも出会う嬉しい散策の場になるのです。こういった多様な自然は残しながら、一方荒れ放題の河川敷の雑草・雑木を除去し、広い河川敷を他の植生に切り替えて利用すれば、それは自然再生にとってどんな意味を持つのかを考えてみると、①治水に役立つ ②水辺の遊びを回復できる ③水辺の自然学習ができる ④景観がよくなる ⑤中海へ流入する余分な栄養が除去できる ⑥菜種・ひまわり・牧草などワイズユース（賢明な利用、ラムサール条約で使われたことば）ができる事に気づくのでした。



業平竹やヨシ・くず密生の河川敷

自然再生協議会飯梨川部会の立ち上げに向けて行政の理解を得ようと、自然再生センターの安来市住者で、県の出先機関として飯梨川を管理している広瀬土木事務所を訪れました。いろいろ話を聞く中で、去年の大雨でダムに流入していた大量の雑木や木切れはこの事務所が整理されたのだということを知りました。

また河川敷の雑草・雑木は一部刈り取るが、限られた予算では繁茂に追いつかない事、渡り鳥との関係では、木をどれぐらい切っても良いのか判断が難しい事などを聞きました。

その後メンバーの集まりの中で、「いきなり大きい面積でなくて良いから、河川敷に雑草のない広場ができて、そこで実験的な自然再生モデルをつくってみようよ」と話が決まり、再び広瀬土木事務所を訪れました。「刃の直径 30 c m 足らずの刈払機では、密生した業平竹の伐採は荷が重すぎる、業平竹だけ伐採除去して貰えば、後は住民パワーで管理するのですが」「それなら早速」ということになり、J R の鉄橋から下へ 150m の河川敷の業平竹伐採が実現しました。あとは地域の人たちのご協力を得て、クズのからんだヨシなどを刈り払い、そのあと、トライアングル（安来市・公益事業支援財団）の資金援助を得て、地元業者の方に実費ボランティアでご協力頂き、広場をローラーでならし、川砂による被土を行いました。こうして、苦もなく水辺に近づける「赤江河川敷広場」が完成したのです。

7月29日、二年目の「飯梨川一斉水質調査」を島根大学と共催で実施した際、この「河川敷広場」を会場として、開会行事から、調査後帰っての昼食、午後子どもを中心に、水辺遊び、手作り工作、西瓜割りのイベントを成功させることができました。

今後この広場を住民の親水の間として、子どもの水遊びの間として、あるいは環境教育の間として使っていくのか。面積の拡大や他の「ワイズユース」を追求するのかを、いま検討しているところです。



草刈りボランティア 綺麗になった広場で一息

河川敷での 牧草栽培へ

飯梨川の中海河口から 3.5km 上のある上水道今津水源地を持つ安来市水道部が川の左岸にあり、その右岸に接して砂流（すながれ）牧場があります。2007年9月のある日牧場主の砂流さんから自然再生協議会飯梨川流域部会副会長の武田さんに連絡がありました。「敷居が高いは承知で広瀬土木事務所に『河川敷で牧草栽培をさせて貰えないか』とお願いに行ったところ、『個人には貸せません。ただし、いま自然再生センターが飯梨川河川敷で自然再生の事業をはじめていますので、そこで相談してみられては』と薦められました」ということでした。安来市には 200 軒に及ぶ畜産農家があり、安い良質の牧草が求められています。

成功すれば大変なワイズユースの実現ですが、乗り越えなければならぬ多くの課題があります。少なくとも来春または来年中に、この事業を実験的段階までにはこぎつけたいと、関係者は夢をふくらませています。

次回 飯梨川流域部会の「協議会」は 11月18日（日）9：30～10：30

「飯梨川水質一斉調査」報告会（島根大学汽水域重点プロジェクト公開セミナー）

10：30～12：30

飯梨川流域部会役員

自然再生センター 飯梨川流域部会 会長 木村好勝 事務局 (有) リンケージ
TEL 0854-22-1233
FAX 0854-22-1232

副会長 武田 研

中海自然再生協議会 飯梨川流域部会協議会 会長 三島俊夫
副会長 武田 研 TEL 0854-22-1073
iinasi.takeda@gmail.com